

久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ

久留米市文化財調査報告書 第167集

持田遺跡

木塚遺跡

へボノ木遺跡

久留米城下町遺跡

山川南本村遺跡

2000. 12

久留米市教育委員会

久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ

持 田 遺 跡 (第1次)

木 塚 遺 跡 (第4次)

へ ぼ ノ 木 遺 跡 (第67次)

へ ぼ ノ 木 遺 跡 (第68次)

久留米城下町遺跡 (第13次)

山川南本村遺跡 (第6次)



1. 久留米城下町遺跡

4. 持田遺跡

2. へぼノ木遺跡

5. 木塚遺跡

3. 山川南本村遺跡

序

豊かな水と緑に囲まれた久留米市は、古来より生活環境に恵まれ、先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しています。

特に、律令期の奈良・平安時代には古代国家の地方行政中枢機関である筑後国府跡や、古代寺院である国分寺・国分尼寺が置かれるなど、行政・文化・経済・交通の要衝として栄えたところでもあります。また近世においても久留米城の築城を契機として城下町が整備され、その名残りは現在の町並みや町名にも息づいています。

このように市内にはたくさんの文化財が存在していますが、その多くは地下に眠る埋蔵文化財であり、毎年、開発の代償として次々に姿を消す運命にあります。そこで私ども教育委員会では、開発によって失われる遺跡を後世に伝えるために、記録保存という形で発掘調査を実施しているところでもあります。しかしながら、その調査成果の全てを公表することは極めて困難であり、貴重な発見がありながらも、陽の目を見ない遺跡が数多くあります。

本書には、平成6年度から平成11年度にかけて発掘調査が行われた遺跡の中で、諸般の事情で調査成果を公表できなかった6遺跡の調査報告を集録しています。本書が郷土久留米の歴史を解明する一資料となるとともに、文化財保護の理解と普及の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解を頂きました地権者の方々をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成12年12月28日

久留米市教育委員会
教育長 桑野善吾

例 言

1. 本書は、平成6年度から平成11年度にかけて調査された遺跡の内、未報告の遺跡を集録した発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、久留米市教育委員会が主体となり、文化財保護課の富永直樹・白木守・小澤太郎が担当した。各遺跡の調査担当者は下記の通りである。

	担当者	略記号	調査番号
持田遺跡（第1次調査）	富永	MTD	199406
木塚遺跡（第4次調査）	白木	KDK	199716
ヘボノ木遺跡（第67次調査）	白木	HBN	199816
ヘボノ木遺跡（第68次調査）	富永	HBN	199830
久留米城下町遺跡（第13次調査）	小澤	KJM	199836
山川南本村遺跡（第6次調査）	小澤	YMH	199912

3. 本書に使用した遺構実測図は各調査担当者が作成した他、荒巻美智代・香月清子・小林美佐代・高田裕子・田中樹子・田中レイ子・植原初美・藤木幸子・丸山 幸・丸山博子・宮崎すえ子・渡辺しげ子・渡邊やつ子の協力を得た。また、遺物宝測・拓本・製図は調査担当者と、非常勤職員の畠中和子・小澤知美・米澤美詠子、および臨時職員小林留美が行った。
4. 遺構写真、及び遺物写真は各調査担当者が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に記した方位のうち、「N」を付したものは磁北を、標記のないものはすべて座標北を示す。また基準点の座標値は国土調査法Ⅱ座標系による。
6. 本書に使用した遺構標記は下記の略号による。
SD……溝 SF……道路跡 SK……土坑 SP……柱穴・ピット
7. 調査に関わる遺物、及び記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。
8. 本書の執筆は各調査担当者が行い、文責は本文目次に記した。また全体の編集は担当者で協議の上、白木が担当した。

本文目次

I. はじめに	(白木) 1
II. 持田遺跡 (第1次調査)	(富永) 3
III. 木塚遺跡 (第4次調査)	(白木) 12
IV. ヘボノ木遺跡 (第67次調査)	(白木) 15
V. ヘボノ木遺跡 (第68次調査)	(富永) 19
VI. 久留米城下町遺跡 (第13次調査)	(小澤) 23
VII. 山川南本村遺跡 (第6次調査)	(小澤) 27
報告書抄録	巻末

挿図目次

*持田遺跡 (第1次)

第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	4
第2図 調査地点と周辺の地形図 (1/2,500)	5
第3図 土層断面実測図 (1/50)	7
第4図 上層の遺構配置図 (1/100)	7
第5図 下層縄文時代の遺物出土分布図 (1/100)	8
第6図 SK 2 出土遺物実測図 (1/2・1/4)	9
第7図 下層出土の縄文土器実測図 (1/3)	10
第8図 下層出土の縄文石器・焼石実測図 (1/2・1/4)	10
第9図 遺構検出面出土の遺物実測図 (1/3)	11

*木塚遺跡 (第4次)

第10図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	12
第11図 調査地点と周辺の地形図 (1/2,500)	13
第12図 木塚遺跡第4次調査遺構配置図 (1/100)	14
第13図 SK 1 出土遺物実測図 (1/4)	14
第14図 確認調査出土遺物実測図 (1/4)	14

*ヘボノ木遺跡 (第67次)

第15図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	15
第16図 調査地点と周辺の地形図 (1/4,000)	16
第17図 ヘボノ木遺跡第67次調査遺構配置図 (1/100)	17
第18図 出土遺物実測図 (1/4)	17
第19図 中央・東地区主要遺構配置図 (1/2,000)	18

＊ヘボノ木道跡（第68次）

第20図	ヘボノ木道跡第68次調査遺構平面図（1/100）	20
第21図	ヘボノ木道跡第18・35・68次調査区の遺構関連図（1/200）	21

＊久留米城下町道跡（第13次）

第22図	久留米城下町道跡調査地点位置図（1/10,000）	23
第23図	出土遺物実測図（1/4）	24
第24図	調査区平面図と南壁面土層図（1/100）	25

＊山川南本村道跡（第6次）

第25図	周辺の道跡分布図（1/25,000）	27
第26図	調査地点と周辺の地形図（1/2,500）	28
第27図	山川南本村道跡第6次調査遺構配置図（1/80）	29
第28図	調査区南壁面土層図（1/40）	29
第29図	土坑実測図（1/20）	30
第30図	出土遺物実測図（1/4）	31

表 目 次

第1表	久留米城下町道跡調査一覧表	26
第2表	山川南本村道跡第6次調査出土遺物観察表	32

図 版 目 次

図版1	(1) 調査前の持田道跡（北から） (2) 重機による表土剥ぎ (3) 調査区北壁土層断面（南から） (4) 調査区西壁土層断面（東から） (5) 上層遺構の全景（東から）	図版6	(1) 木塚道跡第4次調査出土遺物
図版2	(1) SD1, SK2完掘状況（北から） (2) 作業風景 (3) 作業風景 (4) 下層縄文包含層全景（東から）	図版7	(1) ヘボノ木道跡第67次調査区全景（西から） (2) 作業風景①（南から） (3) 作業風景②（南から） (4) ヘボノ木道跡第67次調査出土遺物
図版3	(1) 縄文包含層の遺物出土状況①（東から） (2) 縄文包含層の遺物出土状況②（東から） (3) 縄文包含層の遺物出土状況③（東から） (4) 縄文包含層の遺物出土状況④（東から） (5) 縄文包含層の遺物出土状況⑤（東から） (6) 縄文包含層の遺物出土状況⑥（東から）	図版8	(1) ヘボノ木道跡第68次調査区全景（北から） (2) ヘボノ木道跡第68次調査区全景（東から）
図版4	(1) SK2出土遺物 (2) 下層出土の縄文石器・焼石	図版9	(1) 久留米城下町道跡第13次調査区全景（東から） (2) 調査区南壁面土層（北東から） (3) 調査区南壁面土層東端部（北から） (4) 調査区南壁面土層西端部（北から） (5) SP14遺物出土状況（北から） (6) 久留米城下町道跡第13次調査出土遺物
図版5	(1) 下層出土の縄文土器	図版10	(1) 山川南本村道跡第6次調査区全景（南西から） (2) SK43全景（北から） (3) 調査区南壁面土層（北東から） (4) 調査風景（北から） (5) 山川南本村道跡第6次調査出土遺物

I. 調査の経過

1. はじめに

本書に集録した遺跡は、平成6年度から平成11年度にかけて調査された遺跡のうち、諸般の事情で調査成果が公表されていなかったものである。以下、簡単に調査の概略を記す。

持田遺跡は平成6年度に宅地造成に伴って調査され、縄文・古墳・中世期の遺構・遺物が確認された。主体を占めるのは縄文時代の遺物で、前期および後・晩期の土器・石器が出土した。土器型式を特定する資料に欠けるものの、後・晩期の遺物が中心である。

木塚遺跡は平成9年度に公民館建設に伴って調査された。浄化槽部分に限定された調査であり、調査面積も狭いために詳細は全く不明であるが、平安時代末から中世期の遺物が出土した。また近接する地点からは初期高麗青磁も出土している。

ヘボノ木遺跡第67次調査は平成10年度に浄化槽埋設に伴って調査された。検出された遺構は少なかったが、調査地点はヘボノ木遺跡の東限にあたるものと考えられる。

第68次調査も同じく平成10年度にアパート建設に伴って調査された。確認調査で遺構の掘り下げは実施していないが、奈良時代の溝、近世遺構の溝・道路状遺構などが確認されている。

久留米城下町遺跡は専用住宅および倉庫建設に伴う調査で、平成10年度に実施された。遺構の残存状況を把握するための確認調査であるため、町家の遺構は掘り下げていないが、城下町の調査では珍しい歴史時代（8世紀後半～9世紀代）の遺構・遺物が確認された。

山川南本村遺跡は共同住宅建設に先立つ調査で、平成11年度に実施した。室町時代の土坑・ビットなどが確認され、土師器・瓦質土器・輸入陶磁器が出土した。

さて、久留米市教育委員会では過去に2冊の『久留米市埋蔵文化財調査集報』を刊行しており(註)、本書はその続編である。

(註) 【久留米市埋蔵文化財調査集報(I)―新婦遺跡・吹上遺跡】久留米市文化財調査報告書第47集 1985

【久留米市埋蔵文化財調査集報(II)―内畑古墳―】久留米市文化財調査報告書第51集 1987

2. 調査の体制

本書に集録した遺跡は、平成6年度から平成11年度に及んでいる。各年度および平成12年度における埋蔵文化財調査に関わる調査体制は、下記の通りである。

《平成6年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	桑野 善吾		
調査総括：文化部	部 長	坂田 博春		
文化財保護課	課 長	古賀 幸男		
	主 査	萩原 裕房	埋蔵文化財主査	櫻井 康治
	庶務担当	平田 義弘	古賀 直喜	
	調査担当	富永 直樹	(持田遺跡第1次調査)	

《平成9年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	桑野 善吾
----------------	-----	-------

調査総括：文化部	部 長	川原 幸男	社会教育担当部長	矢次 敏孝
文化財保護課	課 長	古賀 幸男		
	主 査	萩原 裕房	埋蔵文化財主査	櫻井 康治
	文化財主査	松村 一良		
	庶務担当	古賀 直喜		
	調査担当	白木 守	(木塚遺跡第4次調査)	

《平成10年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	桑野 善吾		
調査総括：教育文化部	部 長	坂田 博春	社会教育担当部長	矢次 敏孝
文化財保護課	課 長	古賀 幸男		
	主 査	萩原 裕房	埋蔵文化財主査	櫻井 康治
	文化財主査	松村 一良	富永 直樹	
	庶務担当	古賀 直喜		
	調査担当	富永 直樹	(ヘボノ木第68次調査)	
		白木 守	(ヘボノ木第67次調査)	
		小澤 太郎	(久留米城下町遺跡第13次調査)	

《平成11年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	桑野 善吾		
調査総括：教育文化部	部 長	坂田 博春		
文化財保護課	課 長	古賀 幸男	課長補佐兼主査	萩原 裕房
	事務主査	櫻井 康治	松村 一良	富永 直樹
	庶務担当	古賀 直喜	権藤 節子	
	調査担当	小澤 太郎	(山川南本村遺跡第6次調査)	

《平成12年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	桑野 善吾		
調査総括：教育文化部	部 長	山村 秀明	社会教育担当次長	芳司 定
文化財保護課	課 長	関 知彦		
	課長補佐兼主査	萩原 裕房	(～10月)	
	課主査	堤 諭古	(10月～)	
	事務主査	櫻井 康治	(事前審査・調整)	
		松村 一良	(事前審査・調整)	
		富永 直樹	(埋蔵文化財センター)	
	調査担当	大石 昇	近澤 康治	園井 正隆
		水原 道範	白木 守	小澤 太郎
		神保 公久		
	庶務担当	権藤 節子		
非常勤臨時職員		畠中 和子	小澤 知美	米澤美詠子

II. 持田遺跡(第1次調査)

1. はじめに

本調査は、[]氏による宅地造成事に伴う事前の緊急発掘調査である。平成6年1月17日、地権者の[]氏から久留米市高良内町字九十五把3155-1、3156番地の埋蔵文化財包蔵有無の確認調査の依頼書が提出された。1979年福岡県教育委員会発行の『福岡県遺跡等分布地図』の久留米市・小郡市・御井郡編に周知の遺跡として、近くに持田遺跡・持田古墳群・鳥塚古墳群が認められることから、類似期の遺跡の所在が予想された。試掘の結果、北側の3155-1番地において当初の予想通り遺構・遺物が発見され、埋蔵文化財の所在が確かめられた。調査の必要が生じたので、急速、地権者と協議を行い、今後の対策を講じる事とした。時期的に年度末に近い事もあり、調査中の遺跡が多く、調査員の確保と調査時期の設定を年度内に調整するのが困難であることから、次年度の調査となった。

平成6年度に入り地権者と協議を重ね、造成計画図面の検討によって、新規道路部分に絞り込み、短期日に発掘調査をすることで協議が成立した。大部分の造成区画は約1mの盛土によって、現状保存として調整を図ることにした。6月2日に地権者から発掘調査の依頼が提出されたので、文化財保護法による諸手続きを済ませ、6月14日に[]氏と久留米市長谷口久は委託契約を交わした。

発掘調査は平成6年6月20日から開始した。途中、縄文時代の遺物が検出されたので、面積を限定して縄文包蔵層に当たる下層を掘下げた。現地の作業は7月1日に終了した。

その後、久留米市埋蔵文化財センターにて遺物の洗浄・乾燥・注記・接合・復元・実測・トレース・写真撮影、図面・写真類の整理・登録など、室内整理作業を平成6年9月30日まで行った。

調査に際して、現場の発掘器材置場・休憩用のユニットハウスや簡易トイレなど、全面的な協力をいただいた熊タイヨ建設に対し、厚くお礼申しあげたい。

2. 位置と環境

持田遺跡は、久留米市高良内町字九十五把3155-1、3156番地に所在する。遺跡が所在する高良内町は、耳納山地の尾根より南側で、西端にある高良山の南麓に位置し、高良川によって開析された狭隘な谷水田を耕地に持ち、市内最大の町域を有するところである。高良内町の大部分は山林で占められ、古くからの集落は高良山の南斜面に東西に長く形成されている。明星山から西方に延びる斜面地は、市内でいち早くニュータウンが造成され、それを核とした衛星状の集落(団地)が新しく広がり、様相が一変している昨今である。ニュータウンは「青峰」と町名変更され、行政上独立した町となっている。

遺跡は明星山から西方に延びる丘陵が低台地に移行する付近の、高良川左岸段丘上に立地する。現地表の標高は約56mを測り、徐々に高さを減じながら市街地に至る。遺跡付近の立地をミクロに見ると、北側を西流する高良川に向かって傾斜すると共に、西方にも緩やかに低くなる。また、南にも桃太郎川の上流が西流しているので、全体的に西へ緩傾斜する低丘陵の尾根平坦部に遺跡が乗っている状態といえる。

今回の調査地点は、前節の経過に記したように、県の遺跡分布図にある持田遺跡の近くに当たり、古墳群が周辺に点在している所である。今、県分布図に従って、周辺の遺跡概要を列記すれば次の様になる。なお、番号は第1図に符合する。

社目神社古墳? (3): 高良川のすぐ南の字京蔵にある。安山岩の石材が残り、?マークの条件付きで

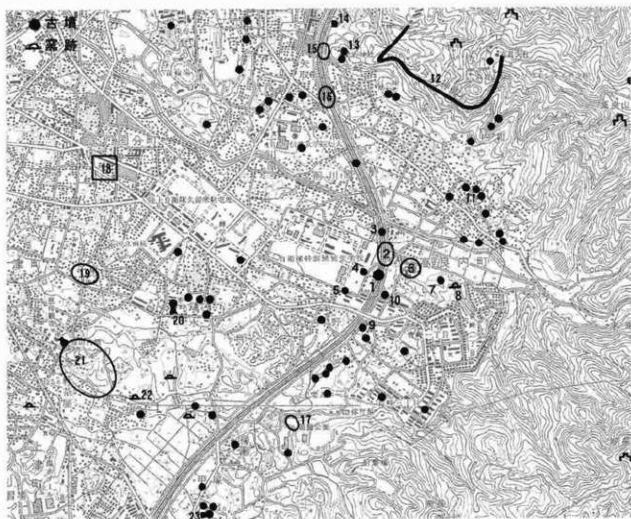
古墳と見なされている。詳しい時期は不詳。

持田遺跡(1)：字持田にある縄文時代の遺跡。後期・晩期の縄文土器が発見されている。

持田古墳群(2)：字持田の現九州縦貫道敷地内にあった、消滅した古墳群である。第1～3号まで3基確認されており、何れも円墳と見なされている。第1号墳は安山岩の大形石材が残っていたらしい。詳しい時期は不明である。

鳥塚第1号墳(4)：現在の自衛隊幹部候補生学校の敷地内で、字鳥塚に在る円墳である。墳丘が認められ、石室が大破している。

鳥塚第2号墳(5)：自衛隊幹部候補生学校の敷地内にある円墳で、字鳥塚に所在する。詳しい時期はわからない。



- | | | | |
|---------------|------------|------------|------------|
| 1. 持田遺跡 | 2. 持田古墳群 | 3. 社目神社古墳 | 4. 鳥塚第1号墳 |
| 5. 鳥塚第2号墳 | 6. 西行古墳群 | 7. 塚田古墳 | 8. 西行古窯跡群 |
| 9. 鰐口古墳 | 10. 赤梨子古墳 | 11. 大谷古墳群 | 12. 高良山神籠石 |
| 13. 礫山古墳 | 14. 祇園山古墳 | 15. 祇園山古墳群 | 16. 宗崎遺跡 |
| 17. ひょうたん山古墳群 | 18. 筑後国分寺跡 | 19. 中隈山古墳群 | 20. 石櫃山古墳 |
| 21. 浦山古墳群 | 22. 池田窯跡群 | 23. 甲塚古墳 | |

第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点と周辺の地形図 (1/2,500)

赤梨子古墳 (10) : 字九十五把に所在する墳丘大破の円墳である。

塚田古墳 (7) : 西行山と呼ばれる丘陵の頂部にある円墳で、字西行に位置する。頂部近くに西行廟を祀るという。

西行古窯跡 (8) : 西行山の奥まった北斜面にある奈良時代の瓦窯跡で、縄目・斜格子など4種の瓦が採集できる。しかし、窯の構造・操業時期は不明瞭である。

鯉口古墳 (9) : 字鯉口に所在した6世紀後半の円墳で、高速道路建設によって消滅した。事前に調査が行われ、胴張り石室を有し、南に開口することがわかった。鉄鎌・馬具、須恵器が発見されている。

他にも、幾つかの古墳が地図にマークされているものの、内容が全く不詳であったり、?マークが付されたりして実体不明のものばかりである。しかし、周辺の遺跡分布の在り方は、古墳が相当存在したであろうことが指摘できる。事実、本遺跡の東方約200mにおいて、西行古墳群 (6) が新たに発見され、平成2～3年度に跨がって調査を実施したところ、削平が著しい25基の円墳の痕跡が隙間なく検出され、5～6世紀の一大古墳群であることが判明した。このように、持田遺跡の周辺は古墳時代に多くの古墳が築かれ、共同墓地として利用された土地柄であったと言えることが出来よう。

3. 調査の経過

調査は、造成工事予定内の新規の道路部分を対象に、長さ15m×幅6mの調査区を設定し、遺跡の時期と内容把握を目的に実施した。重機によって表土剥ぎを行い、遺構の検出・掘下げと写真撮影・実測を済ませた。掘下げ途中において、黒曜石製石鎌や縄文土器片が見出されたため、グリット方式に切り替えて下層の調査約20㎡を行った。調査の結果、上層では溝状遺構・浅い土坑・ピットを僅かに検出したに留まり、下層では縄文土器・石器類・焼石が約百点出土した。発掘調査は平成6年6月20日から開始し、7月1日を以て現地での作業を終了した。以下、調査日誌に基づき、発掘調査の経過を記しておきたい。

平成6年6月20日 (月)

本日より、現地における発掘調査を開始する。発掘器材を搬入し調査の準備を行う。新設道路部分を対

象に、長さ15m×幅6mの調査区を設定する。重機によって表土剥ぎを実施する。現地表面から約30cm下において茶褐色礫混入土を認めたため、地山と見なしてそのレベルで重機の掘削を止めた。

6月21日(火)

調査区の壁切りを先ず行い、遺構の検出をする。遺構の残りは少なく、6月23日までに遺構の掘下げを終える。

6月23日(木)

久留米市測量基準点の高良内No.4とNo.6から、調査区へ座標とレベルを移動する。調査区の北と西壁を清掃し、土層の線引きをする。

6月24日(金)

調査区全体の清掃を行い、上層遺構の完掘写真を撮る。同時に、個別遺構の完掘状況と北・西壁の土層写真を撮影する。実測の割り付けを済ませ、平面の実測を始める。また、遺構が見られないところから、下層の縄文包含層を掘下げ始める。

6月27日(月)

上層遺構の平面実測を終了し、レベル読みを行って縄文包含層の掘下げを続行する。

6月29日(水)

縄文包含層の掘下げを続行する。20㎡の範囲に限定して掘下げを実施したが、-20cmまで下げ終え、約80点程の検出を見る。

6月30日(木)

本日で縄文包含層の掘下げを終了し、遺物の出土状態を写真撮影する。その後、遺物の出土分布の実測とレベルをおさえ、全ての遺物を取り上げる。最終的に、百点の遺物が出土した。

7月1日(金)

発掘器材を整理して撤収する。調査区は重機によって再び埋め戻す。本日をもって、現地の発掘調査作業を終了する。

4. 検出遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

調査の結果、上層遺構は溝状遺構1条・浅い土坑1基と他にピットを検出した。遺物の出土が少なく、時期決定に苦慮する。下層では、縄文土器・石器・焼石が約100点発見された。上層の遺構を個別に説明する前に、調査区の土層について触れておきたい。

a) 土層の説明

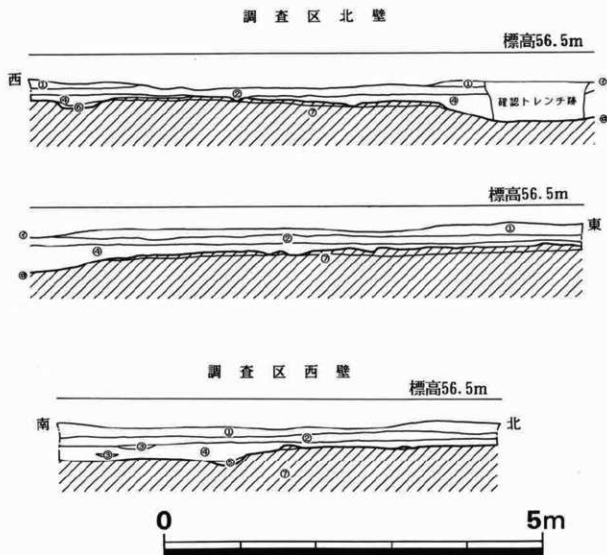
第3図に示す土層図は、調査区の北壁と西壁を表わしたものである。以下、各層ごとに色調や厚さなどの説明を加えることにしたい。

①層—耕作表土層。重機で部分的に削っているため、最上面のラインは波状になっている。本来は水平堆積で、約18cmの厚さを有する。

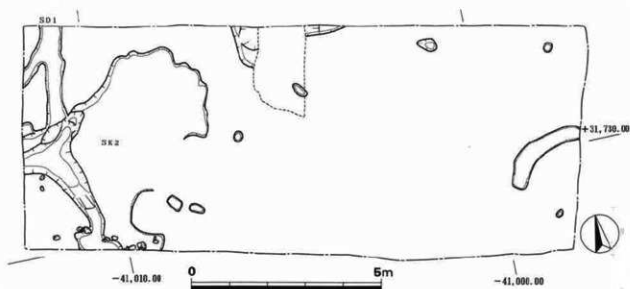
②層—床土に当たる層で、黄褐色を呈する。下面に鉄分の沈着があり、硬い。約5～13cmの厚さである。

③層—暗灰茶色土を呈し、西壁のSK2埋土内に一部認められるブロック状の堆積である。

④層—黒灰色を呈する土で、遺跡全面に広がる。層厚は5～30cmあり、遺構の埋土にもなっている。遺



第3図 土層断面実測図 (1/50)



第4図 上層の遺構配置図 (1/100)

物は殆ど包含されていなく、須恵器や土師器の細片が僅かに出土したに過ぎない。

⑤層-SK2西端の溝状遺構の底に堆積したもので、黒味が強い茶色土を呈する。厚さ7cmを測る。

⑥層-茶褐色土で、SD1の埋土に当たる。厚さ5cmの堆積である。

⑦層-茶褐色礫混入土。縄文時代の包含層で、厚さは25cmを有する。これ以下は、黄褐色礫混入シルトの地山に至る。

b) 上層の遺構(第4図、図版1)

第⑦層上面において検出した上層の遺構は、溝1条と土坑1基で、他にピットが幾つか見られる。

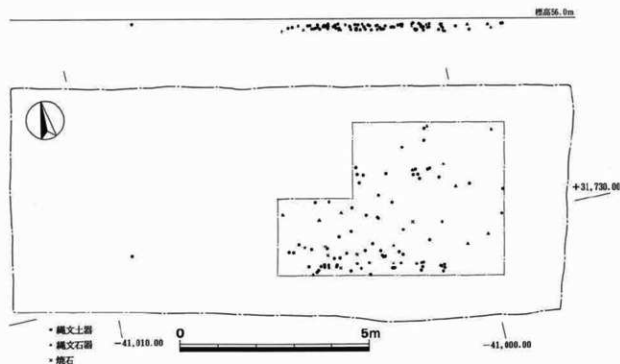
溝(SD1)

調査区の西端にて検出した南北走向の溝である。平面の切り合いから、SK2より新しい。幅40~60cm、深さ3~8cmを有し、長さ7mまで検出した。更に、南北に延びるものである。埋土は茶褐色土で、埋土中から土師器の糸切り小皿片・細片、縄文後・晩期粗製鉢片が少量発見された。

土坑(SK2)

調査区の西側に広く検出した浅い皿状の土坑である。西端は弧状に曲がる溝状遺構が認められるが、別の遺構であるか判断出来なかったので、一つの遺構として取り扱った。東西6m×南北5mの楕円形状をなし、東側の皿状部分の底は幾分起伏が見られる。深さは3~12cmを測る。西側の溝状部分は幅40~60cm、深さ30cmを有する。南壁近くに10~20cm大きさの扁平な片岩が十数点並んで検出された。中に、安山岩製の石皿も混じっていた。埋土中の遺物は少なく須恵器の甕片、縄文後・晩期粗製鉢片、縄文石器を僅かに発見したに過ぎない。

他に、北壁の中央に土坑状の遺構が検出されたが、遺物の出土もなく、性格不明である。また、東端に



第5図 下層縄文時代の遺物出土分布図(1/100)

も弧状の溝が認められたが、約2～3cmと浅く、遺構になるか否か判断できなかった。ピットは7個検出されたが、遺物の出土はない。

c) 下層の遺物出土状態(第5図, 図版2・3)

第5図は、縄文包含層における遺物の出土状態を表わしたものである。上層遺構の少ない東側の20㎡を対象に約25cm掘り下げた結果、縄文土器80点・石器12点・焼石5点が検出された。縄文土器の内訳は前期の土器4点、後・晩期の土器76点であるが、層位的な上下関係が把握出来るような出土状態ではなかった。最上位レベルと最下位レベルの差は約20cmを測り、包含層の厚さが理解される。しかし、遺構の検出もなく、生活面の検出には至らなかった。

(2) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、バンコンテナ1箱分である。縄文時代の遺物が大半を占めており、僅かに土師器・須恵器が見られるに過ぎない。以下、上層遺構の遺物、下層の遺物、遺構検出面の遺物の順に説明を加えたい。

a) 上層遺構の遺物(第6図, 図版4)

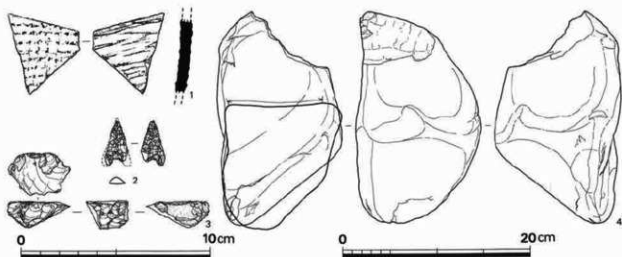
SK2から出土したものである。1は須恵器の甕胴部破片で、外面は正格子目文の叩き、内面は平行文の叩き痕跡が認められる。2は黒曜石製の打製石鏃である。先端・両脚端部を欠損する。3は小形の石核で、平坦打面から6枚の剥片を剥ぎとっている。黒曜石製。裏に自然面を残す。4は安山岩製の石皿で、上端が割れている。使用面は図中の左図にあり、断面の矢印を示した面である。他の面は自然面のままである。

b) 下層の遺物(第7・8図, 図版4・5)

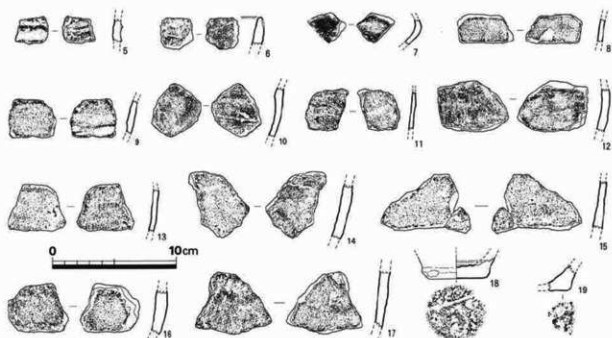
下層の縄文包含層から出土したものである。縄文土器と石器・焼石に分けて説明する。

縄文土器(第7図5～19)

5は外面に隆起文を2条貼り付けたもので、前期の轟B式土器の一群である。内面は貝殻条痕文である。6は粗製土器の口縁部片である。7～12は後・晩期の精製土器の胴部片である。何れも、内・外面が丁寧に磨かれている。7～10は鉢の屈曲する部分である。11の外面に煤が付着する。13～17は後・晩期の粗製



第6図 SK2出土遺物実測図(1/2・1/4)

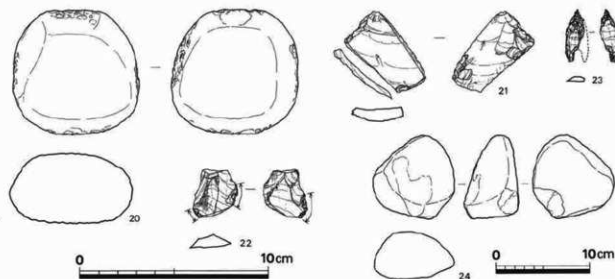


第7図 下層出土の縄文土器実測図 (1/3)

土器で、胴部片である。14・15の内面には煤が付着している。17の外表面は縦方向に板ナデされている。18・19は後期土器の底部である。

石器・焼石 (第8図20~24)

20は安山岩製の敲石で、周縁に使用の跡が残る。21は不定形の剥片を素材とした二次加工石器で、サヌカイト製。打面側の左上に二次加工が並ぶ。22は黒曜石製の二次加工石器で、縦長状の剥片を素材とする。刃部の二次加工は両側縁に認められる。23は黒曜石製の剥片鏃で、片側の脚部を欠損する。先端部に打面が位置する。後期に特徴的な器種の一つであり、後期に比定できよう。24は安山岩の焼石で、二次的被熱によって赤化している。



第8図 下層出土の縄文石器・焼石実測図 (1/2・1/4)

c) 遺構検出面の遺物(第9図)

25は晩期の精製土器の鉢肩部である。26は後期粗製土器の鉢であろうか。板ナデの調整が認められる。27は粗製の鉢胴部片で、地文はヘナタリ条痕である。砂粒を多く含む。28は土師質の土鉢破片である。新しいキズや摩滅が目立つ。29は須恵器の甕胴部片である。外面は正格子状の叩き、内面は平行状の叩きが見られる。



第9図 遺構検出面出土の遺物実測図(1/3)

5. おわりに

今回の持田遺跡の調査は、諸般の事情により、期間・面積ともに僅かな範囲の中でしかできなかったものの、福岡県遺跡等分布地図に掲載の遺跡周知範囲が、更に字三十六まで広がることを確かめることができた。また、遺跡の内容も、縄文後・晩期の散布地だけでなく、縄文前期の包含地・中世期の生活地を新たに加えることができた。今回の調査地点においては、持田古墳群の痕跡を探る手掛かりはつかめなかったが、古墳時代とおぼしき須恵器の出土を見ており、間接ながらも当該期の生活断片を想定できよう。

以下、今回の調査成果を箇条書きして、まとめに代えたい。

1. 縄文時代前・後・晩期の包含地、古墳時代、中世期の生活地の複合遺跡である。
2. 検出した遺構は、中世期の溝1条、古墳時代?の土坑1基、ピットである。
3. 縄文時代の包含層から、前期・後期・晩期の土器・石器が混在した状況で出土した。時期差を示すような層序的出土は認められない。
4. 出土した縄文土器は、小片が多いため、正確な器形や時期を判じ難い。前期は前半の藤B式土器段階で、量的には僅かである。後・晩期が主体を占めるものの、土器型式を特定できる資料に乏しく、詳しい時期は判然としない。
5. 石器の石材には、黒曜石・サヌカイト・安山岩が使用されている。黒曜石は、佐賀県伊万里市腰岳産のものと判断される。

今回の調査は、以上の成果を挙げることができたが、面積の制約があつて遺構の実態を今一つ把握できなかったのは惜しまれる。しかし、調査区以外の周辺は現状のまま保存調整の手だてを講じているので、まだ良好な遺構・遺物が埋藏されているものと予想される。今後の調査に期待したい。

Ⅲ. 木塚遺跡第4次調査

1. はじめに

本調査は、平成9年5月7日に津遊公民館代表の[]氏より、久留米市善導寺町木塚1634-1における、津遊公民館建て替えに先立つ埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は周知の遺跡である木塚遺跡の範囲に含まれるものである。また平成元年度には今回の対象地である天満神社の西側において第3次調査が実施され、中世期の遺構・遺物が良好な状態で確認されているため、発掘調査を必要とする区域であることを依頼者に伝えた。協議の結果、公民館本体部分は基礎構造が浅く、遺構に影響を与えないために保存調整の措置を講じることとし、掘削によって破壊される浄化槽埋設部分のみ立会工事することで合意した。

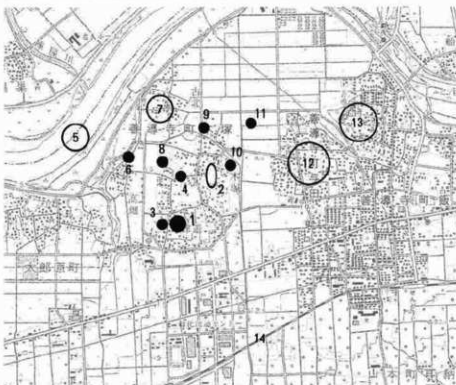
立会調査は7月29日に実施したが、調査面積が3㎡と狭いため、半日で終えることができた。

2. 位置と環境

木塚遺跡は、久留米市街地の東方約8kmに位置する。遺跡の北方には、阿蘇外輪山に源を発する筑後川が西流し、およそ35kmで有明海へと達する。この筑後川の沖積作用によって形成された自然堤防の一つである木塚台地上に遺跡は立地する。

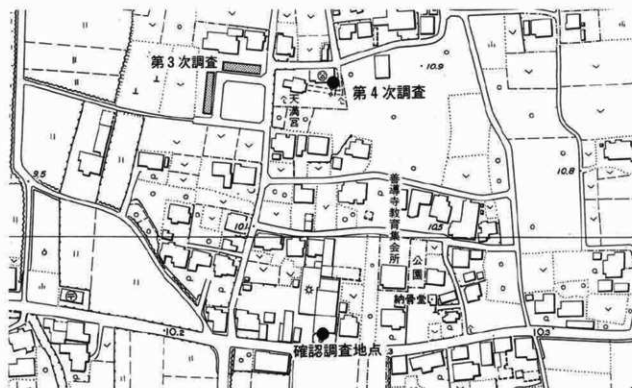
木塚台地上での調査は、昭和50年度に実施された第1次調査、及び翌年に実施された第2次調査が発端となる。これらの調査によって縄文時代から近世に至る遺構・遺物が確認されている。

縄文時代では前期の竊土・曾畑式土器などの出土が認められる。また弥生時代では石棺墓・木棺墓・土槨墓が計10基確認され、その中の1号土槨墓には板付Ⅰ式～Ⅱ式の小壺3個体が副葬されており、筑後川以南では数少ない前期の墳墓として注目される。



第10図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. 木塚遺跡第4次調査
2. 木塚遺跡第1・2次調査
(木塚古墳)
3. 木塚遺跡第3次調査
4. 木塚遺跡第5次調査
5. 古北川底遺跡
6. 宇羅遺跡
7. 古北遺跡
8. 堂前遺跡
9. 北島遺跡
10. 本村1～4号墳
11. 与田土器園遺跡
12. 与田遺跡
13. 大本山善導寺
14. 山本郡条里



第11図 調査地点と周辺の地形図 (1/2,500)

古墳時代で注目されるのは何といっても木塚古墳である。現在の木塚古墳は崩壊が激しく、横穴式石室が辛うじて確認できるに過ぎないが、推定で全長48mの前方後円墳であったことが調査によって明らかとなっている。周囲のトレンチ調査では円筒埴輪や形象埴輪、初期須恵器の器台や樽型甕などが出土しており、5世紀後半の築造と考えられている。

古代の遺構では、南方の耳納山北麓に広く展開する山本郡糸里が著名である。現在でも表層糸里が広範囲にわたって確認でき、往時における土地開発の完成度の高さと、開発に携わった民衆の苦勞を我々に伝えてくれる。

古代末～中世では、1208年の創建と伝えられる大本山善導寺が著名である。本堂と大門が国の有形文化財に指定されているのをはじめ、梵鐘や仏像・絵画などの多くが県や市の文化財に指定されている。木塚台地上ではこの時期の遺構・遺物が普遍的に認められている。また第1・2次調査では15世紀代の遺物も数多く発見されている。

《参考文献》

- 久留米市教育委員会 1977 『木塚遺跡』久留米市文化財調査報告書第14集
 久留米市教育委員会 1999 『木塚遺跡-第5次調査-』久留米市文化財調査報告書第158集

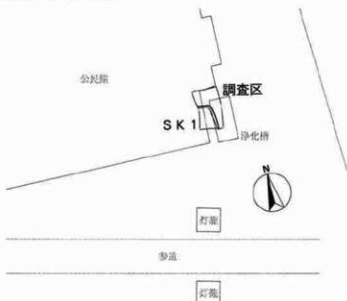
3. 調査の経過

津遊公民館は天満神社の境内に位置する。7月29日に重機により遺構検出面まで掘り下げを実施した。現地表面から90cm余りで明褐色砂質土の地山面に達する。南西隅に土坑状の落ち込みが確認でき、人力で掘り下げを行う。その後、遺跡調査汎用システムを用いて遺構の測量を行った。調査面積が3㎡と狭いため、半日で調査を終えることとなった。

4. 検出遺構と出土遺物

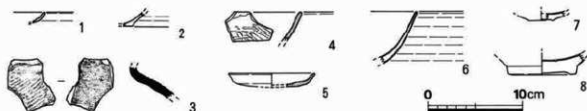
制約された調査範囲であったため、確認された遺構は土坑状の落ち込み1基のみであった。この土坑(SK1)は調査区の南西隅で検出されたもので、深さ10cm程度を測る。埋土は柔らかい黒褐色土で、土師器の小皿・坏、瓦器、輸入陶磁器などがビニール1袋程度出土した。

1は土師器の小皿で、底部はヘラ切り。2は糸切りの坏で、胎土には赤色粒子を含む。3は須恵器の甕で外面には平行文タタキを施し、内面はナデ消し。4は瓦器碗、5は瓦器皿で、共に胎土は金雲母を含む精良。6は龍泉窯系青磁碗のⅠ-1類^{註)}。7は外底部が露胎をなす白磁皿でⅦ類か。胎土に多量の黒色粒子を含む。8は白磁碗Ⅳ-1・a類で、胎土は黒色粒子を多く含む精良。



第12図 木塚遺跡第4次調査遺構配置図 (1/100)

註) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』1978年

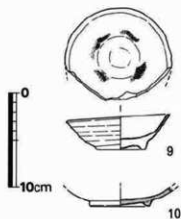


第13図 SK1出土遺物実測図 (1/4)

5. ま と め

制約された範囲内での調査であり、多くを語る事ができないが、今回の調査で得られた遺物の大半は12~13世紀の資料であった。木塚台地上では過去の調査で中世期の遺構・遺物が至る所で確認されており、東方1.5kmに所在する、承元二年(1208)の創建と伝えられる大本山善導寺の繁栄を契機として、木塚台地上にも当該期の屋敷などが広く展開していったものと考えられる。

最後に、今回の調査地点の南方170mの地点(第11図参照)から平成9年度の試掘調査の際に採集された資料を紹介しておく。9は高麗青磁の皿で、オリーブ色の釉がかかり、胎土には細砂粒が多く含まれる。外面はヘラケズリによる調整を施し、畳付は釉を掻き取るために露胎となる。見込には胎土目が4か所見られる。12世紀前半代に多く見られる資料である。10は焼成不良でにぶい黄橙色を呈するが、瓦器碗である。



第14図 確認調査出土遺物実測図 (1/4)

IV. ヘボノ木遺跡第67次調査

1. はじめに

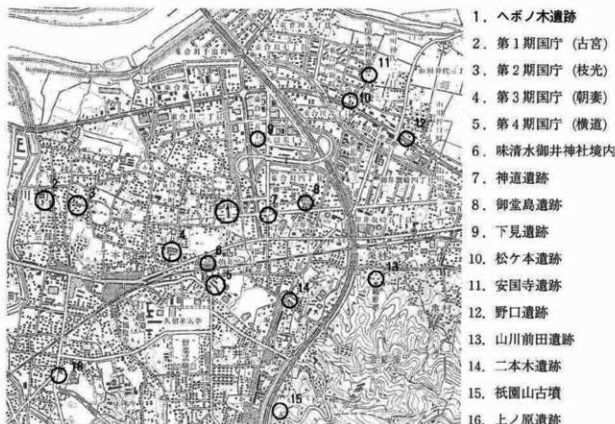
本調査は、平成10年3月24日に地権者 氏より、久留米市御井旗崎一丁目1-1における浄化槽埋設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は周知の遺跡であるヘボノ木遺跡の東端に位置するが、昭和52年より実施された区画整理事業以前には中谷川が流れていた場所でもあり、遺構の残存状況については極めて不安定な状況であった。相手方との協議の結果、同年7月21日に遺構の密度を確認するために試掘調査を実施することとなった。その結果、現地表面から2m余りでピット等の遺構が確認されたため、発掘調査が必要な旨を地権者に伝えた。

地権者との協議の結果、調査面積が約30㎡と狭く、加えて試掘調査で浄化槽埋設予定地の全域を重機で剥いでいたため、工程等を考慮して直ちに本調査に入ることとなった。調査は7月27日より開始し、7月29日に終了した。

なお調査に際して、施行業者である鹿島建設には重機の掘削や矢板等の設置など、種々のご配慮をいただいた。

2. 位置と環境

ヘボノ木遺跡は、西を井田川、東を中谷川に挟まれた低位段丘上に立地し、標高12～13mを測る。遺跡の北方1.3kmには、阿蘇外輪山に源を発する筑後川が西流し、有明海へと注ぐ。遺跡周辺は昭和52年より開始された東部土地区画整理事業に伴って道路網などが整備され、共同住宅や店舗などの建設が急速に推



第15図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

し進められている。また北東には九州縦貫自動車道の久留米インターチェンジが位置し、南側にはJR久大本線の久留米大学前駅が開設されるなど、交通の要衝となっている。

ヘボノ木遺跡における発掘調査は、昭和53年度に実施された第1次調査を皮切りに、平成10年度までに都合68次に及ぶ調査が行われている。その結果、縄文時代から平安時代を中心とした様々な遺構・遺物が確認され、多くの興味深い事象が明らかとなった。

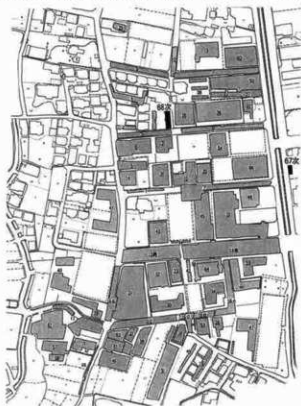
縄文時代では後・晩期の遺物が散発的に認められているものの、目立った遺構は確認されていない。一方でヘボノ木遺跡の周辺では近年、目覚ましい発見が相次いでいる。まず南方400mに位置する横道遺跡では、筑後地方最古の土器に位置付けられる草創期の隆起縄文土器や早期の押型文土器の出土に加え、多くの集石炉が確認された。また南東200mに位置する神道遺跡では後期の竪穴住居が確認され、太郎迫式～三万田式土器が数多く出土した。北方500mの西小路遺跡では後期末の円形竪穴住居から、発掘調査による出土では西日本で初めてとなる石冠をはじめ、石棒・絵画土器などが出土し、東日本との関わりも指摘されている。

弥生時代では、南地区を中心に中期後半、後期後半～終末期の遺構・遺物が確認されている。特に中期後半の遺構群は、6軒の竪穴住居と5基の土坑が確認されているが、いずれも火災を受けた痕跡が認められ、且つ丹塗土器を有するという特徴がある。同時並存が窺える集落としても興味深い。また後期後半段階では鏡片・素環頭刀子・鉄鏃を出土する竪穴住居の存在や、楽浪系土器の出土も認められるなど、水利権を掌握した有力者の存在が指摘できる。

次の古墳時代の遺構は未確認であり、これは西方の筑後国府域でも同様である。弥生時代終末期以降、7世紀後半までのおおよそ350年間、この一帯は空白の時期を過ごすこととなる。

7世紀末～8世紀前半、ヘボノ木遺跡の北地区や南地区に竪穴住居などが営まれ、中央地区には北側に四面庇建物を伴う回廊状遺構が造営される。ヘボノ木遺跡からは多量の瓦の出土を見ることから、この建物が瓦葺きであったことが指摘されている。また土師器の香炉や三鈴杵の置台などの密教法具をはじめ、多量の油煙付着土器や「寺」銘を記した墨書土器の存在など、興味深い遺物の出土から、遺跡の性格については大きく寺院説と郡衙説とに分かれている。

11世紀末、国庁が朝妻から横道へと移転し、徐々に官道沿いの衰退が始まる。ヘボノ木遺跡に押し寄せる波も例外でなく、12世紀代になると周囲に建物群が見られなくなり、墓域としての土地利用が開始される。それは南地区から出土する遺物には、輸入陶磁器や供膳具は多く見られるものの、煮炊具や調理具は皆無であることから、一帯が少なくとも生活域としては利用されなくなったことを物語っている。



第16図 調査地点と周辺の地形図 (1/4,000)

3. 調査の経過

7月21日の試掘の際、遺構検出面までがかなりの深さになることが判明したため、調査に入るまでの間に周囲に矢板を打ち込んで壁の崩落を防ぐ手立てを行った。また道路際でもあったため、墜落防止ネット設置の措置も講じた。

7月27日より遺構の検出作業を開始する。地山面は河川敷に近いめか、礫が多く含まれる。また壁面付近にはかなりの土砂が堆積していたため、遺構検出には予想外の時間がかかった。調査区内へは脚立を利用して昇降するが、暑さと酸素不足による健康面を考慮して小まめに休息をとる。遺構の検出が終了した段階でピットの掘り下げを開始する。なお排土は人力で調査区外へ搬出するのが困難であったため、重機のバケットを利用して搬出した。

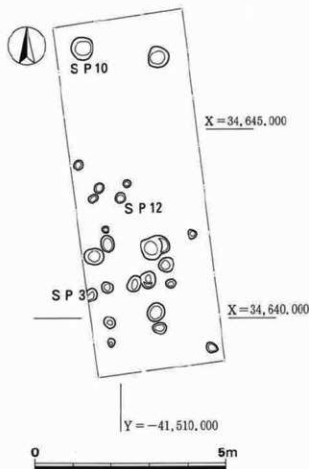
28日は排水作業とピットの掘り下げ、及び遺跡調査汎用システムによる遺構の測量を行う。29日に調査区内の清掃を行い、スカイマスターによる調査区の全景写真撮影を実施し、現地調査を終了する。

なお遺構の測量は遺跡調査汎用システム「カタタ」を用い、そのデータは「カタタ3DC」に記録・保存されている。また記録写真はモノクローム35mm・6×7、カラーリバーサル35mmで撮影した。

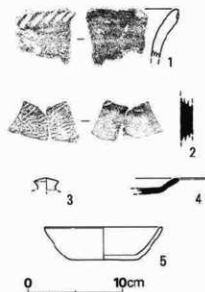
4. 検出遺構と出土遺物

旧河川の河川敷付近にあたり、検出された遺構はピットのみであった。ただし北端で検出した2基のピットは、径50cm、深さ20～30cmの円形の掘形を有し、方向性からみても掘立柱建物の一部を構成している可能性も考えられる。

出土遺物は1点の縄文土器を除いては、全て歴史時代の土師器や須恵器で



第17図 ヘボノ木遺跡第67次調査遺構配置図 (1/100)



第18図 出土遺物実測図 (1/4)

占められるが、出土量は極めて少なく、ビニール袋1袋程度に過ぎない。

1はSP12出土の縄文土器である。深鉢の口縁部で、端部に短直線の施文がなされる。胎土には金雲母・角閃石が含まれる。

2はSP3出土の須恵器である。甕の胴部片で、外面は格子目タタキをナデ消し、内面には青海波文タタキを施す。胎土は精良である。

3は土師器の蓋のつまみである。胎土には赤色粒子を含み、色調は橙色呈する。SP10より出土。

4は須恵器の皿である。小破片のため法量の復元は困難である。底部にはヘラ切り離し痕が残り、胎土は概ね精良。表採資料。

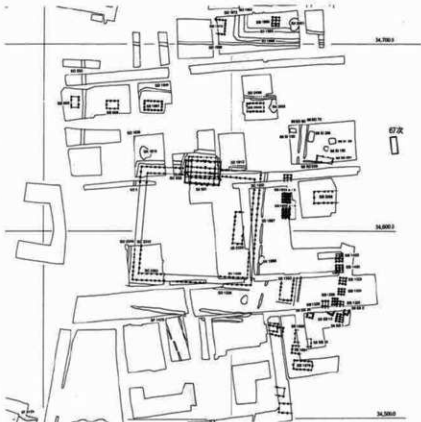
5は土師器の坏で、口径12.5cm、底径7.5cm、器高3.5cmを測る。胎土は赤色粒子を含む精良で、色調は橙色を呈する。底部はヘラ切り離し痕が認められるが、体部との境いはヘラケズリを施す。表採資料。

5. ま と め

今回の調査範囲は約30㎡と狭く、遺跡の性格を把握するには十分な資料が得られなかった。しかしながら、ヘボノ木遺跡の東への広がり、中谷川左岸の河川敷付近にまで遺構の存在を確認できたことは大きな成果であった。以下、限られた資料から得られた情報に基づいて簡単にまとめる。

縄文土器は1点のみの出土であるが後期の北久根山式の範疇に含まれる資料である。この段階の遺物は第62次調査でも出土しており、限られた一時期に生活した痕跡が窺える。後期の集落は南東の神道遺跡や北西の西小路遺跡で堅穴住居が確認され、多量の遺物の出土が見られるものの、これらの遺跡と比較すれば遺物の出土量は圧倒的に少なく、居住域の縁辺部にあたるものと考えられる。

また歴史時代の遺構はビットのみ検出であり、多くを語れないが、今回の調査区はヘボノ木遺跡では最も東方に位置する地点であり、旧中谷川左岸の河川敷付近に相当する。遺構検出面と比較すればヘボノ木遺跡の中央地区とはおよそ1.5m近い比高差が認められる。平成10年度には現在の中谷川を挟んで西側に位置する地点で第66次調査が実施されている。同地点では東方の中谷川に向かって土地の傾斜が確認されているのに加え、徐々に遺構の密度が低くなることも判明している。このことから今回の調査区付近がヘボノ木遺跡の東端にあたるものであろう。



第19図 中央・東地区主要遺構配置図 (1/2,000)

V. ヘボノ木遺跡 (第68次調査)

1. はじめに

本調査は、地権者■■■■氏によるアパート建設工事に伴う事前の緊急調査である。平成10年7月7日、地権者から久留米市東合川三丁目11-11の埋蔵文化財に係る事前審査の依頼書が提出された。当該地は昭和60年度にヘボノ木遺跡の第18次調査として、南北に細長いトレンチ調査を実施したところであった。今回、前の場所と違う場所に、新たにアパート建設が計画されることになり、遺跡を包蔵していることから地権者と協議を重ねた。

周辺一帯のヘボノ木遺跡は発掘調査が進み、奈良～平安時代の遺構・遺物が良好に認められる官衙遺跡であることが判ってきつつある。また、昭和52年以来の東部土地区画整理事業によって旧水田面は埋められ、少なくとも60～70cm程度高くなって、著しく変容している。そうした諸事情を汲み、アパートの基礎を若干嵩上げすること、遺構の把握を主眼とする確認調査に留めることで合意し、文化財保護法の諸手続きを済ませ、平成11年1月29日から調査に着手した。

調査に際して、地権者の■■■■氏はもとより、隣地の駐車場を一時的に提供していただいた(株)ヤナセ久留米営業所に対し、厚くお礼申し上げたい。

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

調査は建設予定地379㎡の内、アパート本体部分を対象として調査区を設定し、ユンボによって掘り下げを行った。しかし、意外にも盛土が厚く、排土置き場と危険防止のため若干縮小せざるを得なくなり、長さ17.5m×幅5mの南北に長い調査区88㎡を発掘することになった。今回は遺構の確認を目的とした調査であることから、掘り下げはせずに遺構の検出のみに留めた。溝が数条重複して認められたため、切り合いに注意しながら遺構の先後関係を把握するよう努めた。遺構検出面までの深さは、南側で1.3m、北端で1.7mを測るものの、地山はわずかに北へ低くなる。

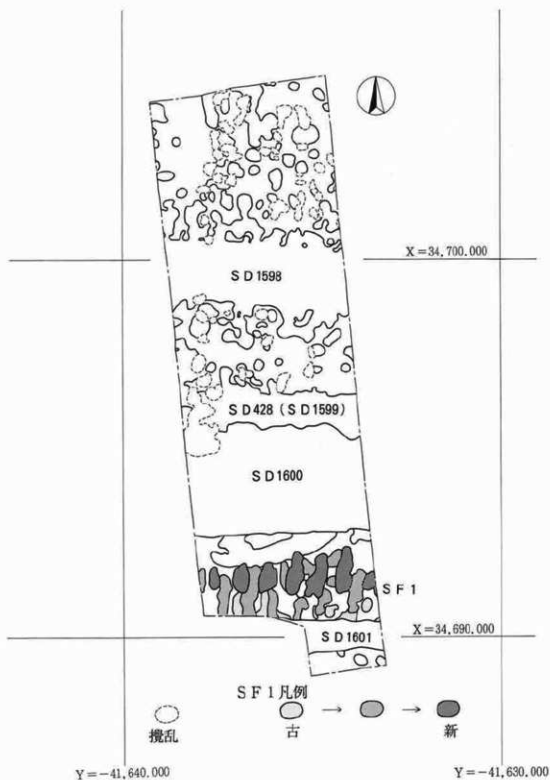
現場の作業は、1月29日から始め2月8日に終了した。初日は重機によって表土剥ぎを実施する。予想以上に深くなったため、排土量が多く一日を要することになった。翌30日から作業員を投入し、遺構検出を行い、溝4条、道路跡1条、ビット多数を確認した。2月2日に調査区全体の写真撮影を実施し、引き続き遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」による遺構測量を行った。しかし、季節的な悪天候にかり雨・雪によって作業が中断し、測量作業が無事終了したのは2月8日であった。

(2) 遺構の概要

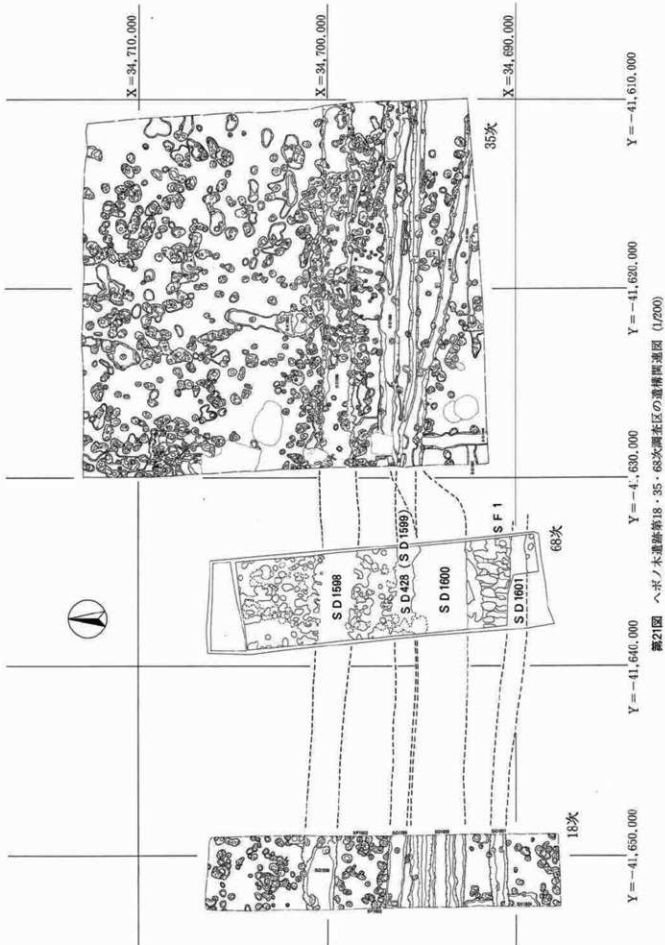
遺構の掘り下げに至っていないため正確な時期は把握できないが、調査の結果、溝4条、道路遺構1条、ビット多数を検出した。掘り下げていないので、遺物の出土は見られない。遺構番号については、過去の調査(第18・35次)において検出されたものと方向性や埋土が明らかに同じと判断できる遺構は、同じ番号を踏襲した。

溝 (第20・21図)

S D1598 調査区北側の東西走向の溝である。ビット群との切り合いで、上面ラインは凹凸が著しいものの、幅1.6～1.7mを測る。埋土は茶黒色土である。第18・35次の成果から、深さ20～30cm、底面フラッ



第20図 ヘボノ木遺跡第68次調査遺構平面図 (1/100)



第21図 ヘボノ木道跡第18・35・68次調査区の遺構配置図 (1/200)

トの溝とされ、8世紀代の遺物が含まれている。四面庇付建物S B301と回廊状遺構などから構成される中央地区と別の建物群から成る北地区の施設を分ける区画溝と考えられる。

S D428 S D1598の南側に平行して走る東西溝である。埋土はS D1598と大差なく、黒茶色土である。S D1600に切られており、東の第35次のS D428に連続する同一溝である。幅70～80cm以上を測り、全体的に蛇行気味の溝である。

S D1600 S D428を切って検出された東西走向の幅広の溝である。検出面では埋土の違いが3種認められ、旧水田耕作土直下の灰茶色土に連続することも判明し、近世以降の比較的新しい段階のものである。西側第18次では、底が2条に分かれており近世陶磁器が出土している。東側第35次では別々の2条の溝と報告された。北側のみS D1600とし、南側の溝はさらに第8次調査で検出されていたS D429に結びつく溝で、共に以前から存在していた道路の側溝と性格付けられている。出土遺物は近世陶磁器・寛永通宝がS D1600から、白磁片・瓦片がS D429から発見されている。

S D1601 調査区の南端にて検出した東西走向の溝で、埋土は暗茶褐色土である。調査区壁の土層観察からS D1600に入り込む埋土より下面に検出されたもので、S D1600より古い溝といえる。SF1の浅い波板状遺構の最も古い埋土を切っている。検出幅は70～80cmを測る。西側第18次のS D1601と溝幅が一致するので、連続するものと考えられるが、東側第35次のS D1601とは幅と方向性が極端に異なることから、連続するには無理がある。第35次のS D1601は別溝と考えたほうが良いように思われる。明確な時期決定は出来なかった。

道路遺構 (第20図)

S F1 調査区南側のS D1600とS D1601の間に検出した道路遺構である。検出面は硬く踏み締められ、移植ゴエの刃が立たないほどであった。長さ80～100cm×幅30～40cmの長楕円形状の浅い波板状の掘り込みが連続して並んで認められ、古代の土師器・須恵器の他、径1～2cm大の砂利が混入して埋められ固められていた。波板状の掘り込み埋土は3種に分かれ、2度の掘り直しが認められた。一番新しい埋土から僅かに近世陶磁器片も含まれていた。最も古い掘り込みの埋土がS D1601に切られていた。この道路遺構は、区画整理前に存在した道路のちょうど真下に当たり、最近まで同じラインで機能していたことが窺える。時期は明確になし得ないが、埋土の堆積状況や溝との切り合いから、近世以降の道路と考えられる。

ビット群

新しい攪乱に混じって、茶黒色の埋土を含むビットが多数発見されものの、深さや他とのつながりが不明であるため、建物を構成する柱穴か否かは判断できなかった。

3. ま と め

諸般の事情により、狭い範囲の限定された確認調査であったが、奈良時代の溝1条・ビット群、近世以降の溝2条・道路遺構1条、時期不明の溝1条を検出した。溝4条の発見は、これまでの第18・35次調査の成果をほぼ追認するものであった。しかし、道路遺構SF1は今回初めて検出したもので、近世以降から昭和期まで使用された道路ラインを再確認するものとなった。

VI. 久留米城下町遺跡（第13次遺跡）

1. はじめに

本遺跡は久留米市本町7-26に所在する。専用住宅・倉庫建設に伴う緊急調査であり、平成10年2月10日付で地権者より埋蔵文化財包蔵地の確認依頼が提出されたことが調査のきっかけである。既存建物解体後の試掘調査の結果、近世域下町以前の遺構が検出された。地権者と協議の結果、基礎工事着工以前にその確認を目的としたトレンチ調査を実施することで合意に達した。

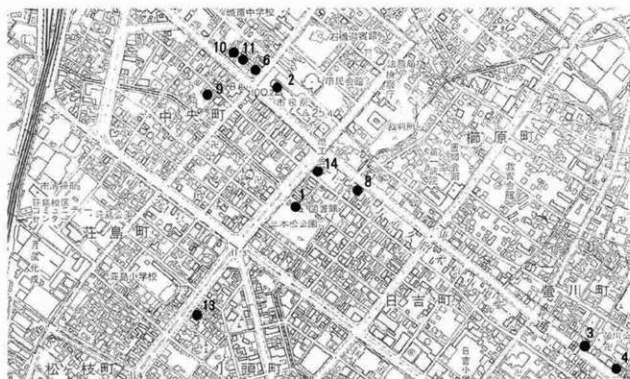
調査は、平成11年3月29日より開始し、同年4月7日に終了した。なお、対象面積は396.91㎡で、そのうち調査面積は、108.5㎡である。

2. 位置と環境

久留米市街地の南部、J久留米駅から南東約1kmの住宅街に位置する。遺跡は、筑後川の中流左岸に形成された低位段丘上に立地し、標高は10~12mを測る。台地北側は池町川による開析谷が形成され、城南台地（仮称）とは分断されている。また、南側にもおこん川が流れ、低台地は西に標高を下げていく。

周辺地域は、市街化が早く進んだために発掘調査が進まず、近年になって徐々に調査例が増加してきている。調査では主に近世遺構が検出されるのだが、それ以前の遺構が検出された例も出てきた。京限侍屋敷遺跡第1次調査では、奈良時代の土坑が1基検出されており、土師器が出土している。律令期の筑後国は、10郡を有し、付近一帯は三瀬郡に相当する。今後、当該期の遺構が検出される可能性は大きい。また、圓夢町遺跡の中世後期の溝や井戸が検出されている。久留米城築造前後の時期に相当する。

天正15年（1587）に手利桑向、その後田中吉政の治世を経て、元和7年（1621）に有馬氏が久留米に入城し、久留米城の大改造や武家屋敷・町屋の建設を実施した。当地は、原古賀4丁目の町屋に相当する。原古賀町は久留米城外堀の南東部城外から三本松町を経て南側に延びる通り沿いに発達した町屋である。



第22図 久留米城下町遺跡調査地点位置図 (1/10,000)

※数字は調査次数

3. 調査の記録

(1) 調査の概要

対象地北側に20m×5mの東西トレンチを設定、重機による表土剥ぎを実施した。施工責任者の(株)太陽建設工業のご協力で廃土を調査区外に運び出すことができたため、対象地南側にテント・駐車場スペース・廃土置き場を確保することができた。

写真記録は、カラーリバーサル35mm、モノクローム35mm・6×7で撮影した。図面記録は、遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」で測量し、土層図(1/10)については、水糸メッシュ法で実測した。

以下、調査日誌を抄録する。

平成11年3月29日 現地での調査を開始する。重機による表土剥ぎを実施。座標移動。

3月30日 降雨のため作業を中止する。

3月31日 遺構検出を開始。

4月1日 殆どが近世・近代の遺構だが、平安時代のビットを検出する。

4月5日 「カタタ3DC」で測量を開始する。

4月7日 器材を撤収し、調査を終了する。

(2) 遺構の概要

調査区現況はフラットで、地表面で標高12.7mを測る。-1.2mで地山面に達し、この面までは複雑な堆積を繰り返している(第24図)。検出遺構には、平安時代のビット41基、溝1条の他、近世以降の井戸・土坑・ビット等がある。以下、主要な遺構について触れる。

SP1 調査区南東隅で検出した浅い落ち込みである。覆土は黒茶色土で、土師器の皿・甕細片、内黒土器の碗細片が出土している。

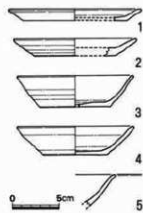
SP9 調査区中央東寄りで検出したビットである。直径約20cm、深さ約60cmを測る。出土遺物に土師器の坏・皿等がある。火鉢・陶器細片は、近世遺構からの混入と考えられる。

SP14 調査区中央東寄りで検出したビットである。規模は、直径18cm、深さ約35cmである。覆土中から土師器の坏が出土した。

SP21 調査区南西部で検出した浅い落ち込みである。土師器の坏・甕細片が出土した。

(3) 遺物の概要

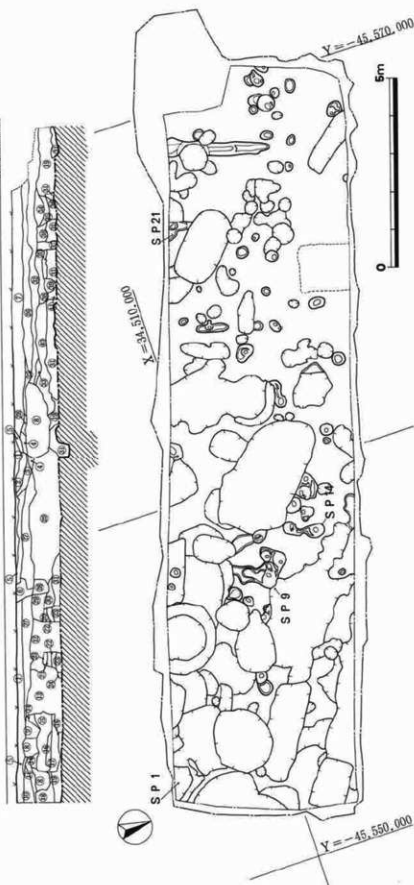
近世の遺構は、掘り下げを行っていないため、殆どが奈良～平安時代頃の土師器細片である。1は、SP1出土の須恵器皿である。1/8程が残存し、復元値は口径14.0cm、器高1.2cm、底径10.8cmである。色調は灰色で、外底部はヘラ切り調整である。2は、SP9出土の土師器皿で、約1/8が残存する。器壁が厚く、復元値は口径13.0cm、器高1.8cm、底径8.6cmである。色調は明褐色を呈する。3・4はともに、SP14から出土した土師器の坏で、その復元値は前者が口径12.3cm、器高7.6cm、底径3.3cm、後者が口径12.4cm、器高7.0cm、底径3.0cmである。色調は、それぞれ橙色、にぶい黄褐色である。外底部はいずれもヘラ切り調整で、後者には板状圧痕が見られる。5は、SP21出土の土師器坏片である。色調は、外面が黄褐色で、内面は明黄褐色を成す。図示したものについては、すべて焼成は良好である。



第23図 出土遺物実測図(1/4)

1. 褐色土+バラス+コンクリート
片+レンガ (灰土)
2. 褐色粘土ブロック
3. 黒灰色土+暗赤色土粒
4. 暗黒灰色土+礫
5. 灰土
6. 赤灰色土
7. 褐色土+バラス+コンクリート
片+レンガ+黒色砂質土 (灰土)
8. 灰褐色土+淡黄色粘土ブロック+コ
ンクリート片+レンガ+礫
9. 暗灰色土+コンクリート片+レンガ
+瓦+礫
10. 赤灰色土+淡黄色粘土ブロック+瓦
+礫
11. 黄白色粘土ブロック
12. 黒灰色土+黄緑色砂質土ブロック+
赤褐色土ブロック+礫
13. 暗赤灰色土+淡茶褐色粘土ブロック
+黄灰色砂質土ブロック+黒色土
ブロック
14. 暗灰色土+黄灰色粘土粒+礫
15. 赤灰色土+粘土+赤灰色土
16. 灰化物+赤灰色土
17. 赤褐色土+乳灰色土+灰化物若干
18. 暗赤灰色土
19. 黒茶色土
20. 黄灰色砂質土+褐色粘土
21. 褐色粘土+黒灰色土
22. 褐色粘土+黄灰色砂質土
23. 褐色粘土
24. 黄灰色砂質土
25. 黄灰色砂質土+黄白色粘土ブロック
26. 暗赤灰色土
27. 黄白色粘土+赤灰色土+角礫
28. 暗赤灰色土+礫
29. 暗赤灰色土
30. 暗赤灰色土
31. 黒色土
32. 灰褐色土+黄褐色粘土粒
33. 黄褐色粘土
34. 淡茶褐色土+褐色土ブロック
35. 赤灰色土+褐色土粒若干
36. 暗灰色土+褐色土
37. 明赤褐色土+暗灰色土ブロック
38. 暗赤灰色土
39. 暗灰色土+褐色土ブロック
40. 暗灰色土
41. 灰褐色土+褐色土ブロック

標高13.00m



第24図 調査区平面図と南壁面土層図 (1/100)

4. ま と め

久留米城下町遺跡において、はじめて平安時代の遺構が確認された。出土遺物からは、主に8世紀後半代～9世紀代の年代を導き出せる。本調査地では、地表下約1.2mで地山面に到達し、その上面に土師器等を包含した黒色土層(包含層)が堆積している。包含層は、近世から現代にかけての遺構によって寸断されながらも、通りに面した西側では比較的良好な状態で残存していた(町屋の裏庭にあたる東側は、極めて著しく攪乱されている)。調査面積が狭いこともあり、検出したピット群を掘立柱建物の柱穴と認定するには至らなかった。しかし、ピットには深くて残りがよいものも多く、周辺には良好な状態で遺構が残存する可能性もある。本調査区内では、それほど密集した状態で検出された訳ではない。感覚的には、集落の周辺部に当たるように思える。

第1表 久留米城下町遺跡調査一覧表

次 数	調査年度	調査番号	地 区 名	所 在 地	調査面積	調査原因	報告書	調査担当者	備 考
第1次	平成元年	198911	三本松町	日吉町4-1	200㎡	公園整備	1	大石	
第2次	平成3年	199119	両替町	城南町15-3他	4,500㎡	市庁舎建設	3	大石・古賀	
第3次	平成6年	199431	通町六丁目	通町105-30	10㎡	専用住宅建設		古賀	確認調査
第4次	平成6年	199444	通町七丁目	通町106-12	30㎡	共同住宅建設		園井	
第5次	平成6年	199445	本町四丁目	本町14-17	35㎡	専用住宅建設		古賀	
第6次	平成7年	199501	呉服町	城南町14-7	215㎡	店舗建設	2	大石	
第7次	平成7年	199503	通町九丁目	通町109-24他	100㎡	共同住宅建設		富永	
第8次	平成7年	199515	通町四丁目	通町10-4他	60㎡	社屋建設		古賀	
第9次	平成7年	199516	田町	中央町21-16他	228㎡	事務所建設		大石	
第10次	平成7年	199533	魚屋町(1次)	城南町13-21他	458㎡	社屋建設	4	水原	
第11次	平成8年	199623	魚屋町(2次)	城南町13-19他	265㎡	社屋建設	4	園井	
第12次	平成9年	199729	通町十丁目	通町354-1他	36㎡	共同住宅建設		富永	確認調査
第13次	平成10年	199836	本町七丁目	本町7-26	108㎡	専用住宅+倉庫	5	小澤	
第14次	平成12年	200016	米屋町	日吉町1-1他	245㎡	共同住宅建設		園井	

《久留米城下町遺跡調査報告書一覧》

- 1) 大石 昇編 1992 『三本松町遺跡』久文報第74集。
 - 2) 大石 昇編 1995 『久留米城下町・呉服町遺跡』久文報第104集。
 - 3) 大石 昇編 1996 『久留米城下町・両替町遺跡』久文報第116集。
 - 4) 水原 道範編 1997 『久留米城下町・魚屋町遺跡：第1・2次調査』久文報第123集。
 - 5) 小澤 太郎 2000 『久留米城下町遺跡：第13次調査』『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ』久文報第167集。
- ※久文報とは、久留米市文化財調査報告書の略。

Ⅶ. 山川南本村遺跡 (第6次調査)

1. はじめに

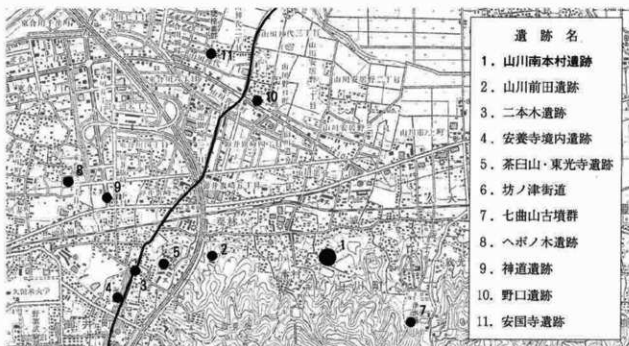
本遺跡は久留米市山川町字南本村665-1に所在する。調査のきっかけは、平成11年6月7日付で地権者の■■■■氏から共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことによる。当地域は『福岡県遺跡等分布地図』030323番「南本村遺跡」として周知の遺跡である。また、平成6～9年度にかけて第1～5次にわたる発掘調査が実施されている。その際の確認調査で、調査地に2本のトレンチが設定されており、ピットを中心とする遺構の存在が確認されていた。このため地権者と協議を行い、建物基礎が遺構を破壊する対象地北東側部分を調査することで協議成立した。

同年7月9日付で地権者から発掘調査の依頼が提出されたのを受け、文化財保護法にかかわる諸手続きを経て、7月23日に■■■■氏と久留米市長白石勝洋は、「山川南本村遺跡埋蔵文化財調査委託契約書」を取り交わして平成11年7月30日より調査開始し、同年8月10日に終了した。なお、対象面積は931㎡で、そのうち調査面積は73㎡である。

2. 位置と環境

久留米市の東部に横たわる水繩山地の緩傾斜面に位置する。水繩山地はその北麓を縁どるように水縄活断層系が分布し、断層によって形成された崖面を急傾斜の谷が開折している。谷は数多く形成され、水繩山地北麓には、複合扇状地が発達している。調査地はこの扇状地上に立地し、標高は約30mを測る。東側は小谷となっており、その谷頭には水繩山地からの伏流水を集めた堤がある。

山川南本村遺跡は、5次に渡る調査で弥生時代～鎌倉時代にかけて営まれた複合遺跡であることが判明している。弥生時代は、前期末～中期初頭の集落跡で、堅穴住居・掘立柱建物・土坑・溝などの遺構が検出されている。遺物として、弥生土器や石器等がみられるが、大陸系の磨製石器が極端に少なく、縄文系



第25図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第26図 調査地点と周辺の地形図 (1/2,500)

の打製石器が大半を占める特徴が見られる。古墳時代も、竪穴住居・掘立柱建物で構成される集落跡である。竪穴住居跡からはメノウ製小玉が出土する。概ね6世紀後半の年代が想定される。奈良時代は、竪穴住居・土坑等があり、転用硯も出土している。平安時代には、掘立柱建物、土坑・溝・土壇墓などが検出され、10世紀を中心とした年代が考えられる。鎌倉時代では、掘立柱建物・土坑・井戸・区画溝・土壇墓などが検出されており、屋敷地が営まれていたことが判明した。

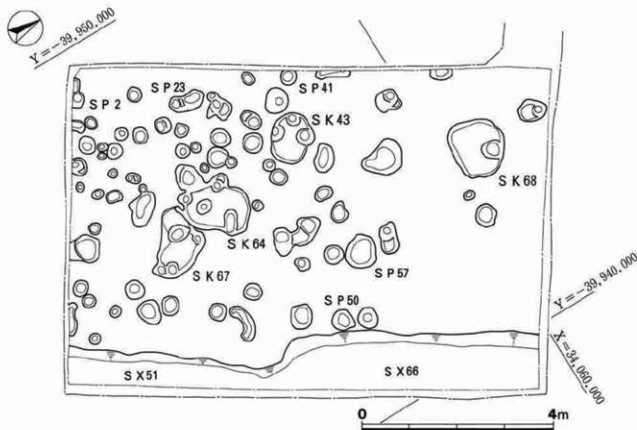
また周辺の遺跡も数多く所在する。西に約700mの地点には、『日本書紀』天武7年12月条(西暦679年1月)に記載された「筑紫大地震」の震源と考えられる断層が発見された国指定史跡の山川前田遺跡がある。西へ約1.4mの高良山西麓には、二本木遺跡・安養寺境内遺跡・茶臼山遺跡・東光寺遺跡が存在する。12～13世紀前半頃の段階では、多数の土坑や掘立柱建物が営まれ、多種多量の輸入陶磁器が消費され廃棄されている。安養寺境内遺跡では、方形竪穴状遺構が集中して営まれており、物資の集積場であった可能性も考えられる。鎌倉時代には、筑後国の交易の拠点として繁栄していたものと思われる。同地は、西海道から路線変更された坊ノ津街道沿いの「府中宿」にあたる。同街道は、正保3年(1646)に再整備され、現在も主要道路として活用されている。

3. 調査の記録

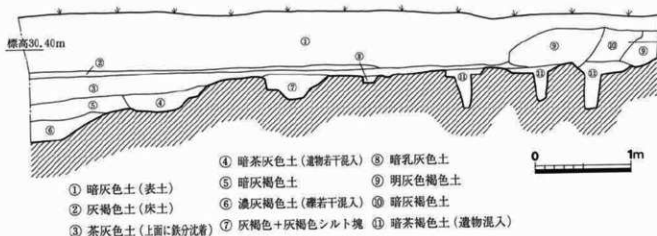
(1) 調査の概要

対象地東側から表土を剥ぎ、西側を廃土置き場とした。遺構面は東側と北側に傾斜しており、土層南壁面では、西側で深さ約60cm、東側で深さ1.3mを測る。調査区東側は、谷に向かって落ち込んでいる。

写真記録は、カラーリバーサル35mm、モノクローム35mm・6×7で撮影した。図面記録は、遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」で測量し、土層図(1/10)については、水系メッシュ法で実測した。



第27図 山川南本村遺跡第6次調査遺構配置図 (1/80)

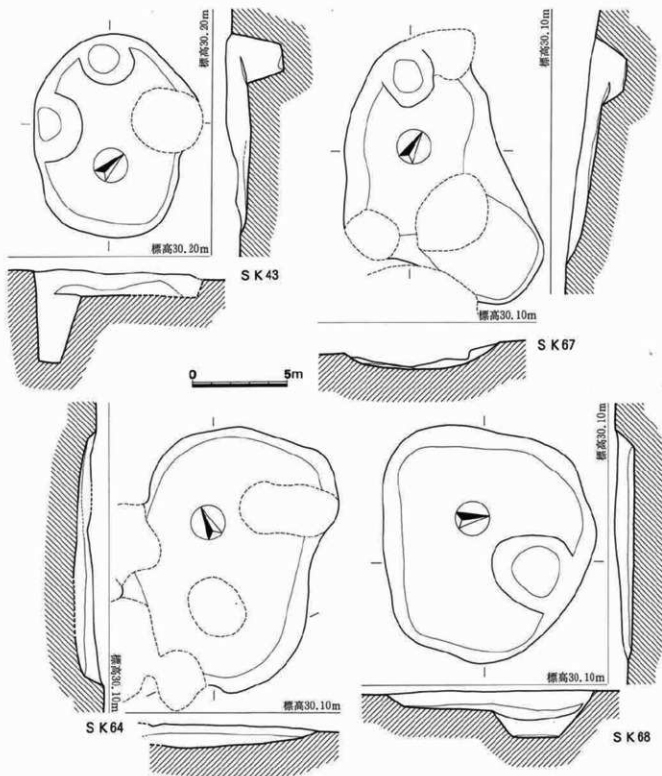


第28図 調査区南壁面土層図 (1/40)

(2) 遺構の概要

基本土層は、60cm程の表土層下に約5cmの灰褐色土層、5～45cm程の茶灰色土層を経て、礫を大量に含む地山面に達する。

検出遺構には、土坑4基、ピット多数などがある。ピットには、深さ40cm程もある比較的残りの良いものも見られるが、明確に掘立柱建物として纏まるものはない。殆どの遺構が室町時代に属するものと思われる。



第29図 土坑実測図 (1/20)

SK43 (第29図, 図版10)

調査区の中央やや西寄りに位置する。平面形は楕円を呈する。長軸1.06m、短軸約80cm、深さ約15cmを測る。底部はフラットで北西側と南西側にビット状の掘り込がある。切り合い関係が不明で、本来土坑に伴うものかどうかは判断できない。遺物は糸切り底の土師器坏片2、同小皿片3などが出土した。

SK64 (第29図, 図版10)

調査区の中央やや南寄りにある。平面形は小判形で、長さ1.35m、幅約90cm、深さ約15cmを測る。底部屋や中央部が窪む。出土遺物は少なく、僅かに土師器の細片が見られるのみである。

SK67 (第29図, 図版10)

調査区中央南寄りに検出した、平面形小判形の土坑である。規模は長さ1.17m、幅約80cm、深さ約10cmを測る。突出するものの、本来は別の遺構として区別すべきものと思われる。両者間にピットが絡んでおり、切り合い関係を把握するに至っていない。出土遺物はない。

SK68 (第29図, 図版10)

調査区北側に検出した土坑である。隅丸方形に近い平面形を呈し、長さ1.24m、幅1.07m、深さ約10cmである。北側に15cm程の窪みがあるが、別のピットが重複している可能性もある。出土遺物はない。

SX51・66 (第27図)

調査区北側に検出した落ち込みである。先述したように東側は開析谷となっており、遺構面は緩やかに傾斜している。角礫等と共に、土師器の坏、椀、土鍋、茶釜、瓦質土器の火鉢、陶器の壺、白磁片などが出土している。

(3) 遺物の概要

出土遺物は、パンコンテナー1箱分と少ない。僅かに弥生土器が出土しているものの、室町時代遺構への混入品である。遺物の主体は、室町時代の土師器と少量の瓦質土器、陶磁器である。個々の遺物についての観察表を以下に付した。

遺物実測図凡例

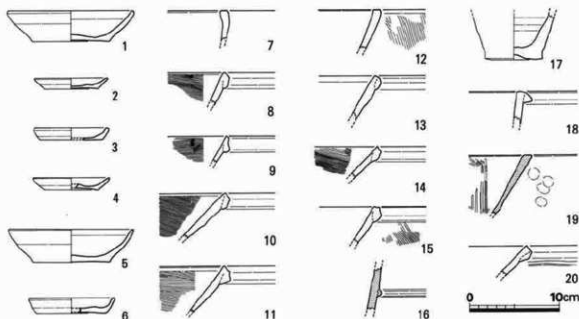
断面網かけは、瓦質土器を示す。

遺物観察表凡例

1. 口径・底径・器高の単位はcmである。() の数値は現存値を示す。

2. 陶磁器の色調は、軸色である。

3. 調整のうち、「回転ナデ」はロクロ回転によるナデ、「横ナデ」は内底にみられるロクロ静止状態のナデを示す。「糸切り」はロクロ回転を利用した底部切り離しを示す。



第30図 出土遺物実測図 (1/4)

第2表 山川南本村遺跡第6次調査出土遺物観察表

遺物No	出土遺構	種 別	器形	法 量 (cm)			色 調		調 整		灰 土	焼成	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面				
1 第30区	SP2	土師器	坏	(142)	(8.3)	3.45	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切底	回転ナデ 横ナデ	細砂粒	良		199912 -00001
2 第30区	SP2	土師器	小皿	(82)	(6.0)	1.2	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切底	回転ナデ 横ナデ	細砂粒	良		199912 -00002
3 第30区	SP2	土師器	小皿	(86)	(6.0)	1.35	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切底	回転ナデ 横ナデ	細砂粒	良		199912 -00003
4 第30区	SP2	土師器	小皿	(84)	(7.0)	1.35	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 糸切底	回転ナデ 横ナデ	微砂粒	良		199912 -00004
5 第30区	SP23	土師器	坏	(140)	(8.5)	3.65	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切底	回転ナデ 横ナデ	砂粒	良		199912 -00005
6 第30区	SP41	土師器	小皿	(96)	(7.6)	1.65	橙	橙	回転ナデ 糸切底	回転ナデ 横ナデ	砂粒	良		199912 -00006
7 第30区	SP50	土師器	鉢				黒	黄灰	ナデ	ハケメ	砂粒	良	外面ス 付着	199912 -00007
8 第30区	SP50	土師器	鍋				黒褐	にぶい橙	ナデ	ハケメ	砂粒	良	外面ス 付着	199912 -00008
9 第30区	SP50	土師器	鍋				灰褐	にぶい橙	ナデ	ハケメ	細砂粒	良		199912 -00009
10 第30区	SX51	土師器	鍋				黒	橙	ナデ オサエ	ハケメ	砂粒	良	外面ス 付着	199912 -00010
11 第30区	SX51	土師器	鍋				黒褐	にぶい橙	ナデ オサエ	ハケメ	3mm程の砂	良		199912 -00011
12 第30区	SX51	土師器	鉢				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	砂粒	良		199912 -00012
13 第30区	SX51	土師器	鍋				にぶい橙	にぶい橙	ナデ オサエ	ナデ	4mm程の砂	良		199912 -00013
14 第30区	SX51	土師器	鍋				黒褐	にぶい橙	ナデ オサエ	ハケメ	細砂粒	良		199912 -00014
15 第30区	SX51	土師器	鍋				黒	にぶい橙	ハケメ	ナデ	3mm程の砂	良		199912 -00015
16 第30区	SX51	瓦質土器	火鉢				灰白	灰白	回転ナデ	ナデ	細砂粒	良		199912 -00016
17 第30区	SX51	陶 器	甕				緑オリブ 灰	灰白	回転ナデ	回転ナデ	砂粒	良	全面に路箱	199912 -00017
18 第30区	SP57	弥生土器	甕				淡橙	淡黄橙	ナデ	ナデ	9mm程の小石	不良		199912 -00018
19 第30区	SX66	瓦質土器	攪鉢				灰褐	黄灰	ナデ オサエ	ハケメ	砂粒	不良	攪目4本	199912 -00019
20 第30区	SX66	土師器	鍋				灰褐	にぶい橙	ナデ オサエ	ナデ	砂粒	良		199912 -00020

4. ま と め

過去の調査で見られた、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落関連遺構は検出することができなかった。今回検出した遺構の殆どは、室町時代に属するものと思われる。検出したピットが掘立柱建物として明確に讀まなかったものの、比較に残りが良いものも多く、今後面的に調査する機会があれば、建物柱穴として確認できる可能性はある。出土遺物は、土師器の坏・小皿・土鍋が主体をなし、一般的な集落の様相を示している。本調査では、鎌倉時代以降も引き続き人々の生活が営まれていたことがわかった。

《山川南本村遺跡調査報告書》

久留米市教育委員会 1998【平成9年度久留米市内遺跡群】久留米市文化財調査報告書第140集。

久留米市教育委員会 1999【山川南本村遺跡：第1～4次調査】久留米市文化財調査報告書第148集。

圖 版



(1) 調査前の持田遺跡 (北から)



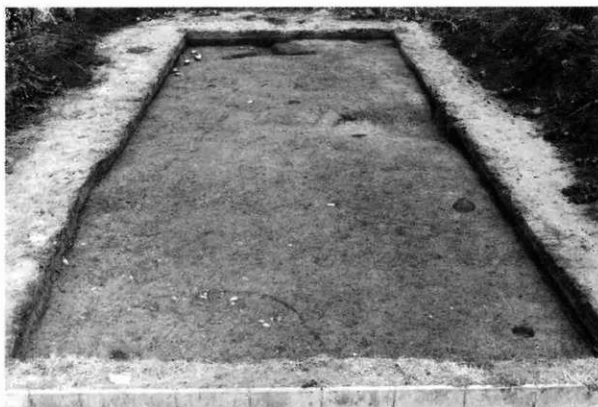
(2) 重機による表土剥ぎ



(3) 調査区北壁土層断面 (南から)



(4) 調査区西壁土層断面 (東から)



(5) 上層遺構の全景 (東から)

図版2



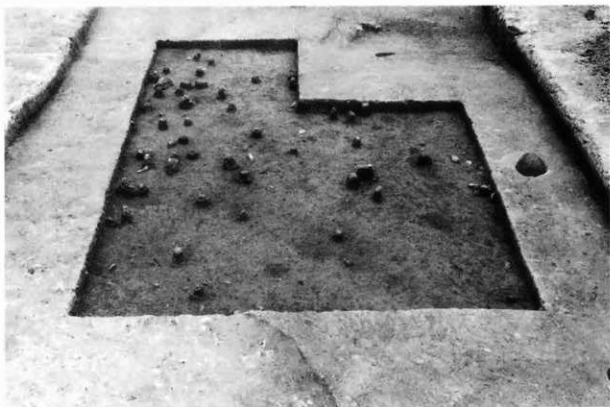
(1) SD1, SK2完掘状況 (北から)



(2) 作業風景



(3) 作業風景



(4) 下層縄文包含層全景 (東から)



(1) 縄文包含層の遺物出土状況① (東から)



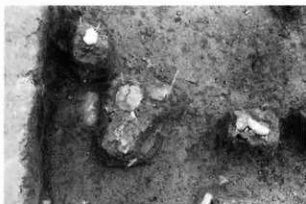
(2) 縄文包含層の遺物出土状況② (東から)



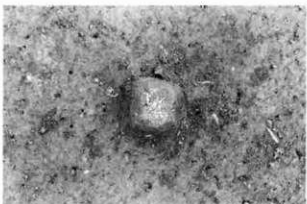
(3) 縄文包含層の遺物出土状況③ (東から)



(4) 縄文包含層の遺物出土状況④ (東から)

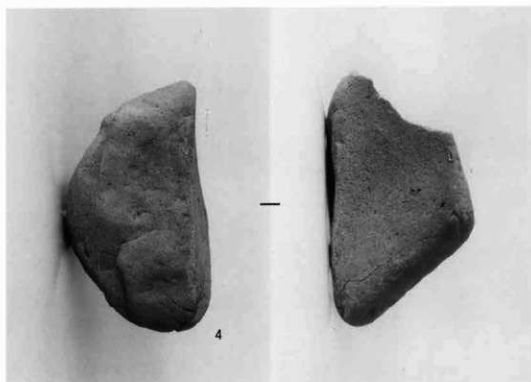
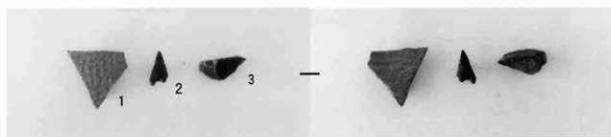


(5) 縄文包含層の遺物出土状況⑤ (東から)

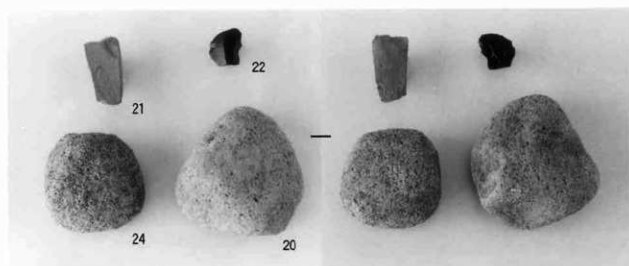


(6) 縄文包含層の遺物出土状況⑥ (東から)

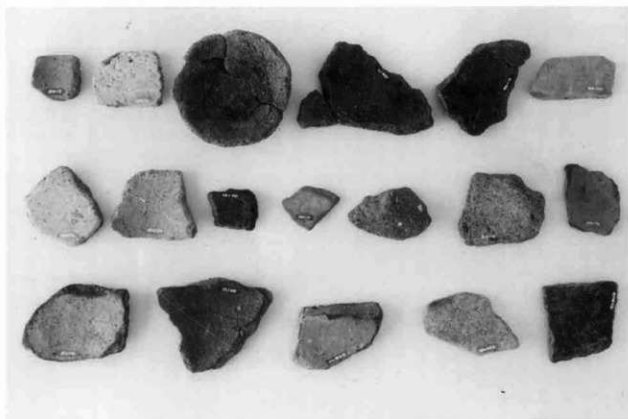
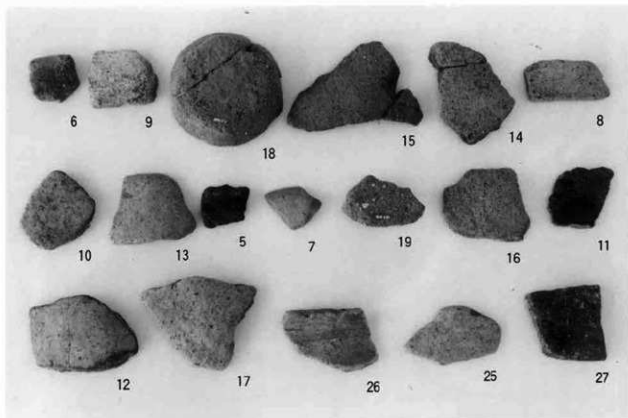
図版4



(1) SK 2 出土遺物

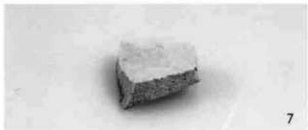
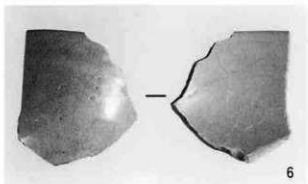
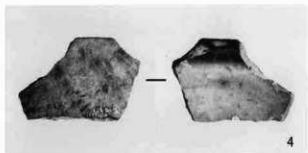


(2) 下層出土の縄文石器・焼石



(1) 下層出土の縄文土器

図版6



(1) 木塚遺跡第4次調査出土遺物



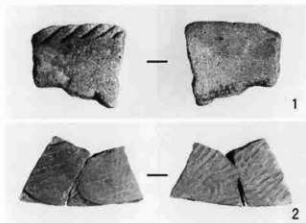
(1) ヘボノ木遺跡第67次調査区全景 (西から)



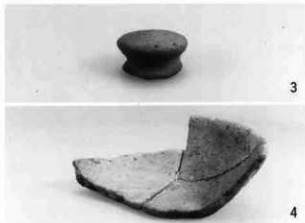
(2) 作業風景① (南から)



(3) 作業風景② (南から)



(4) ヘボノ木遺跡第67次調査出土遺物



図版8



(1) ヘボノ木遺跡第68次調査区全景 (北から)



(2) ヘボノ木遺跡第68次調査区全景 (東から)



(1) 久留米城下町遺跡第13次調査区全景 (東から)



(2) 調査区南壁面土層 (北東から)



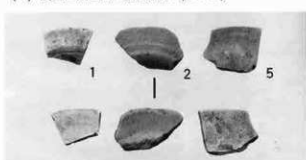
(5) SP14遺物出土状況 (北から)



(3) 調査区南壁面土層東端部 (北から)



(4) 調査区南壁面土層西端部 (北から)



(6) 久留米城下町遺跡第13次調査出土遺物

図版10



(1) 山川南本村遺跡第6次調査区全景 (南西から)



(2) SK43全景 (北から)



(3) 調査区南壁面土層 (北東から)



(4) 調査風景 (北から)



1

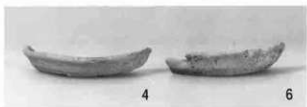


2

3



5



4

6



17

(5) 山川南本村遺跡第6次調査出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	く る め し まいごうぶんか ざいりょうさしゅうほう Ⅲ							
書 名	久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第167集							
編著者名	白 木 守・富永直樹・小澤 太郎							
編集機関	久留米市教育委員会 教育文化部 文化財保護課							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3			TEL 0942-30-9225		FAX 0942-30-9718		
発行年月日	2000 (平成12) 年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
持田遺跡 第1次調査	久留米市高良内町 字九十五杞	40203	030696	33° 17' 14"	130° 33' 39"	1994.06.20～ 1994.07.01	90㎡	宅地造成
木塚遺跡 第4次調査	久留米市善導寺町 木塚字義畑	40203	030185	33° 19' 14"	130° 35' 39"	1999.07.29	3㎡	浄化槽埋設
ヘボノ木遺跡 第67次調査	久留米市御井 旗崎一丁目	40203	030145	33° 18' 42"	130° 33' 15"	1998.07.27～ 1998.07.29	29㎡	浄化槽埋設
ヘボノ木遺跡 第68次調査	久留米市東合川 三丁目	40203	030145	33° 18' 45"	130° 33' 09"	1999.01.28～ 1999.02.08	88㎡	共同住宅建設
久留米城下町遺跡 第13次調査	久留米市本町	40203		33° 18' 37"	130° 29' 21"	1999.03.29～ 1999.04.07	108㎡	倉庫併用住宅
山川南本村遺跡 第6次調査	久留米市山川町 字南本村	40203	030323	33° 18' 22"	130° 34' 15"	1999.07.30～ 1999.08.10	73㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
持田遺跡 第1次調査	包含地 集落跡	縄文 中世	溝 土坑	1条 1基	縄文土器・石器 須恵器			
木塚遺跡 第4次調査	集落跡	鎌倉	土坑	1基	土師器・須恵器・瓦器・ 輸入陶磁器			
ヘボノ木遺跡 第67次調査	官衙跡	奈良～平安	ビット		縄文土器・土師器・須恵器		ヘボノ木遺跡の東側に 位置する	
ヘボノ木遺跡 第68次調査	官衙跡 集落跡	奈良～平安 江戸	溝 ビット 道路状遺構 溝	2条 1条 2条	遺物なし			
久留米城下町遺跡 第13次調査	集落跡 集落跡	平安 江戸	溝 ビット 井戸・土坑	4条	土師器・須恵器			
山川南本村遺跡 第6次調査	集落跡	室町	土坑 ビット	4基	土師器・輸入陶磁器			

久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ

【久留米市文化財調査報告書 第167集】

平成12年12月28日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

編集 教育文化部 文化財保護課

印刷 香和印刷株式会社
久留米市津福本町2320-15